

ブルー・アイランド氏が やりたかったこと

第1回 ガムラン奏者

東南アジアの島嶼部、へく

にインドネシアのバリ島に
伝わる民俗芸能であるガム
ランは、常に観光客を魅了し

て止まないオーケストラである。竹製
の笛（スリン）や、立てて弾く胡弓（ル
バーフ）などを使うこともあるが、基本としては鉄琴（グン
デル）や銅鑼（ゴン）などの金属打楽器だけを用いるため、
煌やかな音の煙が立ち昇るといった表現が相応しい。

1889年のパリ万国博覧会で、初めてヨーロッパに紹介
されたとき、当時最高の作曲家たちは衝撃を受け、自作品
にその響きを採り込んだ。ラヴェルの「マ・メール・ロア」や
プーランクの「フルート・ソナタ」、やや時代が後になるが
メシヤンの「トゥーランガリラ交響曲」やシヨリヴェの「赤道
コンツェルト」などにその影響を聴くことが出来る。

B（ブルー・アイランド＝青島）もまた、作曲家を目指し
た頃にまずレコードでその演奏に接した。日本唯一の民族
音楽研究家だった小泉文夫が監修し、自ら現地録音して
来た世界の音楽シリーズが、容易に手に入ったのである。ひ
いては東京藝術大学で本人の授業を受けたとき、それまで
遠かったガムランとの距離が、一瞬縮んだのを感じた。

しかしその夢はすぐに破れる。「ガムラン音楽実習」は、
楽理科だけの選択科目で、Bは作曲科だったのだ。しかも打
楽器だけの曲はなかなか書くチャンスが回って来なかった。

直接現地で聞くことが出来たのは、1978年、大学院2
年生のとき、伴奏などのアルバイトで貯めたお金でインド
ネシアに飛び、一週間の休暇を楽しんだ際である。しかし当
時はその本拠地であるウブド村でも、まだ体験ツアーなど
は開かれておらず、用途によって様々な編成があるのだと
いうことが解っただけだった。そしてどうやら両面に腰の
ある太鼓（クンダン）奏者が基本の拍を示す、いわば指揮者
で、曲の終わりは各奏者のフィリングに任せられているよ
うだった。楽器ごとにリズムのパターンがあり、そうした異
種のリズムが組み合わさって、複雑なリズムを作り上げて
いるのである。これはバリの芸術の特徴で、細かいパーツの
集合体が巨大な作品となり、そのパーツは地味な作業の繰
り返しだ。

これがBにとっては何とも面白くない行為に感じられた
のである。規律の上での少しの自由ではなく、完全な自由
が欲しいのだった。それ故、Bはガムランを習っていない。



写真提供：インドネシア共和国観光省 ガムランオーケストラ



文と絵 青島広志

1955年東京生まれ。東京藝術大学および大学院修士課程（作曲）を首席で修了。作曲した作品は、「火の鳥」などのオペラや、「マザー・グースの歌」などの合唱曲など200曲を超える。ピアニスト、指揮者としての活動も40年を超え、コンサートやイベントのプロデュース、書籍、イラスト執筆も。東京藝術大学講師。洗足音楽大学客員教授。よみうりカルチャー荻窪で「世界の名歌を歌う」の講師を務め、この10月からは「よみうり大手町スクール」で「オペラ417年を半年で！」（10/5から6回）と、単発の「音楽家が語る 日本・少女マンガ史——『リボンの騎士』から『24年組』まで』（11/28）も担当する。来年1月8日（成人の日）には、よみうり大手町ホールで「2018青島広志のみんなで歌おうニューイヤー・コンサート」も開催。

写真提供：Gakken Pub